

〈調査報告〉

宗教的マイノリティの「記憶の場」

～ベルリン・ユグノー博物館～

塚本 栄美子

はじめに

ベルリンの地下鉄 U2 と U6 の交差する「シュタットミッテ (Stadtmitte)」を最寄り駅とするジャンダルメンマルクトの一角に、本稿で扱う「ベルリン・ユグノー博物館」はある。現在はその駅名通り「市の中心」に位置する、このエリアは、第⑤展示室に掲げられた地図(1652年、J. G. メムハルトによる)には存在しない(図1)。この街区は17世紀後半以降拡大されたエリアで、1760年ごろのもう一枚の地図(G. N. ラスベによる、図2)で見ると、西側に広がる碁盤の目状に整備された部分に当たる。この整備された新街区に入植地を形成したのが、博物館の主たちの祖先たちである。ベルリンの中心地の形成は、彼らの定住の歴史と不可分に結びついていたのである。

社会のなかでマイノリティとされる人びとと博物館の設置の関係が、歴史家の関心をひくようになって久しい。第二次世界大戦後、植民地支配の反省や国民国家形成の反動がみられるようになると、先住民や少数民族と



図1 第⑤展示室の様子(1)



図2 1760年当時のベルリン(2)

いった、国民国家の枠組みから零れ落ちた人びとへの関心が喚起されるようになった。多くのマイノリティの博物館は、こうした人びとの文化を自身たちからも国家側からも顕彰し、保存する場を提供することになったのである。と同時に、こうした博物館の存在意義や役割も歴史的に検証されるようになった⁽³⁾。

他方、移民として故郷とは別の地で生きることを選択したマイノリティたちもいる。彼らも国民国家形成が進展するなか、相互扶助、同じルーツを持つ者たちのアイデンティティの形成と維持、ホスト社会での権利獲得とその保障要求のために、自分たちの文化や歴史を記憶にとどめ置く場を必要とした。こうした脈絡で設置された移民系の博物館は、とりわけアメリカというフィールドにおいて研究の対象とされた⁽⁴⁾。さらに、近年ではグローバル化の進展にともない、送り出した社会の側からも移民たちの艱難辛苦の歴史を顕彰する場を設けることの意味を考察しようとする動きが出ている⁽⁵⁾。

ところが、宗教的マイノリティにかかる博物館の設置や展示内容をめぐる歴史的研究は必ずしも多くない。もちろんベルリンでも、ユダヤ人については、ホロコーストとの関係もあり、ユダヤ博物館やホロコースト記念博物館についての論考がみられる⁽⁶⁾。だが、フランス系改革派住民とその子孫たち、すなわちユグノーたちのそれに対する関心は低い。

ユグノーに関していえば、フランスのミアレ近郊にあった、カミザール戦争のプロテスタント指導者ピエール・ラポルト(通称ロラン)の生家を核に1911年に建てられた「荒野の博物館」に関する論考を挙げることができる程度である。ピエール・ノラの「記憶の場」プロジェクトにも含まれるフィリップ・ジュタールの「プロテスタント 荒野の博物館」⁽⁷⁾は、博物館の展示だけでなく設立経緯から記念集会の催しを通じて強く押し出された18世紀の荒野の記憶が、家族的記憶としてユグノーたちに定着し結束を強めたばかりではなく、カトリックのフランスにおいてさえユグノー史の国民的記憶への統合を可能にしたと論じ、「荒野の博物館」とそこで演出される記憶の強い影響力を明らかにしている。

ドイツでも、ユグノーたちのコロニーが形成されたヘッセンやバーデ

ン・ヴェルテンベルク各地で彼らの入植・移入の歴史を想起させる博物館が設けられている。なかでも、注目に値するのが、ドイツ・ユグノー協会の本部でもある、バード・カールスハーフェンに1980年に設立された「ドイツ・ユグノー博物館」と、本稿で取り上げる「ベルリン・ユグノー博物館」である。スーザン・ラヒェニヒトは、この二つの博物館を含むドイツとイギリスのユグノー博物館の意義を比較・検討している。そのなかで彼女は、移民であると同時に宗教的マイノリティでもある集団にとって、博物館が、薄れゆく彼らの文化や歴史を留め、集団としての社会的紐帯やアイデンティティの保持に貢献する「記憶の場」であると同時に、ホスト社会との良好な関係構築を図る場でもあることに関心を寄せている⁽⁸⁾。結果として、そこで描かれる歴史は、ユグノーだけの文化や記憶であるばかりではなく、非常に複雑な問題を抱えながらもホスト社会とともに刻まれた記憶である。それゆえ、各博物館には類似点も見られるが、個別に検討する必要がある。ここではまず、ベルリン・ユグノー博物館を事例に、その一歩を踏み出したい。

ベルリン・ユグノー博物館は、2017年7月末、改修工事のために休館した(2019年再開予定)。30年続いた常設展は、いわば一区切りついたともいえる。そこで、本稿では、本格的な開館から一貫して続けられてきた展示内容を確認し、「記憶の場」としての「ベルリン・ユグノー博物館」の意義を再確認することを目的とする。読者の方がたには、休館に際しホームページで公開されているヴァーチャル・ツアー⁽⁹⁾で観覧を追体験しながら、先に進んでいただきたい。

1 ベルリンのユグノーたちの「記憶の場」ジャンダルメンマルクト

はじめにベルリンを含むブランデンブルク選帝侯領(のちにブランデンブルク＝プロイセン)の宗派状況を確認しておこう。当領邦は、選帝侯による改宗というかたちで二度にわたる宗教改革を経験している。一度目は1539年ヨアヒム2世によるルター派改宗であり、二度目は1613年ヨハン・ジギスメントによる改革派改宗である。外面上ともに上からの改革という

かたちで行われた。

ところが、その結果は正反対であった。前者では、そもそも領内のパトロナート(聖職者推薦権)を保有する在地貴族らがルター派であったこともあって、選帝侯三代にわたりルター派に基づく教会規定の作成ならびに教会巡察の実施が行われ、領邦君主を長とする領邦教会制が確立された。臣民たちも君主のルター派改宗に従ったといえる⁽¹⁰⁾。しかしながら、後者の改宗は、聖職者や神学者たちだけでなく、在地貴族や市民たちの強い反対にあい、早い段階で宮廷だけに限定されたものに終わった。結果として、ブランデンブルク選帝侯領は君主と臣民の信仰が不一致という領邦経営上大きな困難を抱えることになったのである。その後、宮廷側は、行政や司法の場において改革派の影響力の拡大を図ったり、たびたび寛容令を出すことによりルター派臣民との融和を図りながら改革派信仰を漸次的に浸透させようとしていた。しかし、そうした努力にもかかわらず、結果はなかなかついてこなかった⁽¹¹⁾。

そうしたなか、1685年、フランスで改革派住民の信仰を特権的に保障していたナント王令が廃止される。フォンテーヌブロー王令である。ブランデンブルク選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルム(大選帝侯)がこれに呼応するかのように、彼らを領内に誘致するポツダム勅令を發布する。その結果、ベルリンのフランス系改革派住民の数は1698年には6000人弱に達し、ベルリン住民の4人に1人はユグノーとなった⁽¹²⁾。その後1732年の8900人をピークに彼らの数は減少するが、1793年のフリードリヒ・ニコライの『ベルリン案内』でも4830人を数え⁽¹³⁾、ほぼ5000人をキープしベルリン市内の外国人としては最大の勢力を誇った。

歴史的事実として、彼らは、必ずしもドイツ系ルター派住民を改革派に改宗させる呼び水とはならず、ドイツ系改革派住民とともに宗教的マイノリティとしてベルリンおよびブランデンブルク選帝侯領内に定住していくことになる。だが、こうした結果はともかくとして、ポツダム勅令發布後数年で大選帝侯の後継となったフリードリヒ3世(プロイセン王としては1世)は、彼らにまずはドイツ系住民と隣接しつつ同化する場を用意した。それが、冒頭に紹介した碁盤の目状の新街区であり、のちに「ジャンダル

メンマルクト」と呼ばれるようになるフリードリヒシュタット広場だったのである。

入植当初、フランス系改革派信仰難民たちは宮廷内の選帝侯の礼拝堂を利用していたが、そこも入植者の増加にともない手狭になっていった。また、ポツダ



図3 創建当初のフランス人教会と塔建設前後のジャンダルメンマルクトの建物の配置図(第⑧展示室)

ム勅令によってフランスで行っていた通りの独自のやり方で礼拝を守ることが保障されたこともあり、入植者たちにとっては間借りではなく自分たちの教会を持つことが悲願であった。そしてようやく1701年から5年の歳月をかけて彼ら専用の教会が建設されたのが、広場の北側だったのである(図3)。ただ、建設されたのは彼らの教会だけではなく、広場の南側にドイツ系改革派とルター派の共同使用の礼拝堂も建設されたのである。

1730年代にはいると、プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム1世の命により、この地には甲騎兵部隊“Gens d'armes”のために軍関連施設が拡大された。ところが、後継王フリードリヒ2世時代に広場の光景は一変する。彼は、軍関連の施設を撤去し、フランス喜劇を上演するための小屋を建てたのである。加えて、1780年代に、それぞれの教会に丸形の屋根(ドーム)をいただいた塔の建築を認める。その後、演劇小屋は国立劇場、シャウシュピールハウス、コンツェルトハウスと様変わりするが、フリードリヒシュタット広場は^{ジャンダルメンマルクト}Gendarmenmarktと呼ばれるようになり、基本的な光景をかえぬまま三百年ほどのときを過ごしてきたのである(図4)。

このようにジャンダルメンマルクトは、フランスからやってきたユグノーたちにとって自立の一步を踏み出した地でもあり、ベルリンの人びととの共生をスタートさせた地でもあった。そして、のちに展示内容の紹介でみるように紆余曲折を経ながらもユグノー博物館を含むフランス人教



Der Gendarmenmarkt in Berlin · The Gendarmenmarkt in Berlin · Le Gendarmenmarkt à Berlin



ドイツ聖堂



コンツェルトハウス



フランス聖堂

図4 現在のジャンダルメンマルクトに佇む建物群(14)

会・聖堂は、今もこの地でドイツ教会・聖堂と向き合い佇んでいる。この広場は、少数派としてベルリンの地に生き続けたユグノーたちにとって今でも戻るべき原点であり、まさしく「記憶の場」なのである。

2 「記憶の場」としてのベルリン・ユグノー博物館

～2017年までの常設展～

ここで博物館自体の歴史を振り返っておこう。

すでに別稿で指摘したように⁽¹⁵⁾、ベルリンのフランス系改革派住民たちは、入植以降自分たちの記憶と歴史を、ホスト社会の情勢を見定めながら醸成し、ポツダム勅令発布100周年、200周年の記念年をとらえてはそれらを巧みに演出し、内向きにはアイデンティティの強化を、外向きには集団としての存在価値をアピールしてきた。ナチスが政権をとるなか迎えた1935年もそうした記念年のひとつだった。

ポツダム勅令発布250周年にあたる、この年、ベルリン・フランス教会のメンバーの一人、アルフレッド・ザクゼが、フランス聖堂のなかにユグノー

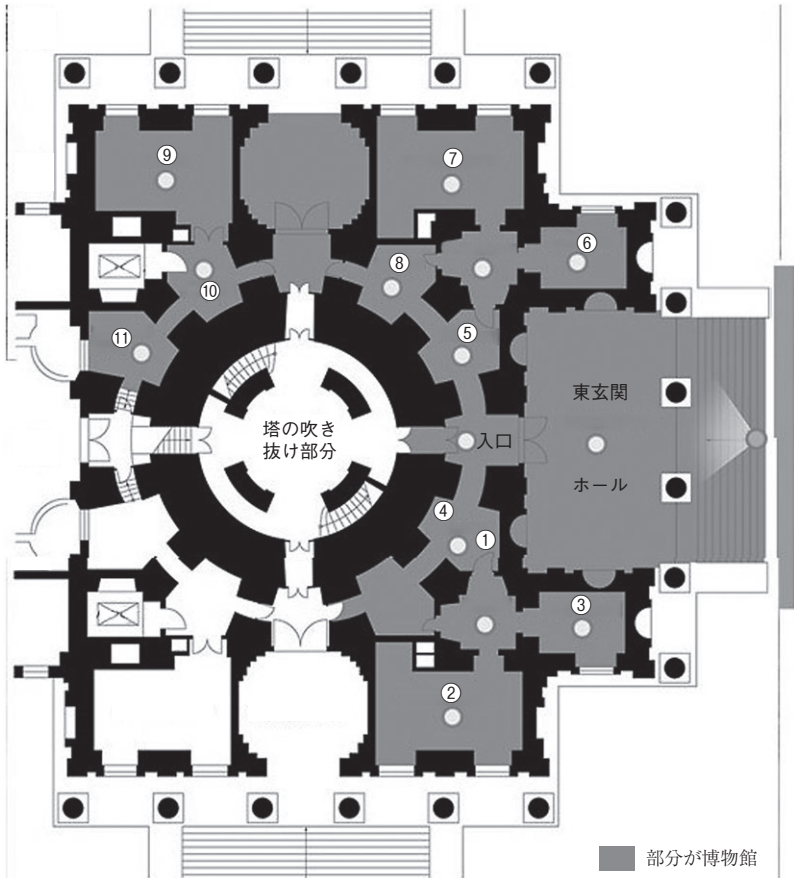


図5 ベルリン・ユグノー博物館の見取り図(16)

博物館を創設することを思いついたのが始まりである。当初は、毎週日曜日の礼拝後、購入や寄付によって集めたコレクションを小さな部屋に展示する程度だったという。そして、3年の歳月をかけてようやく、最初の特別展「大選帝侯と信仰難民たち(Der Große Kurfürst und die Réfugiés)」を開催するまでに事業の拡大が図られた。

1939年 Huguenottische Erinnerungsstätte(ユグノー記念館)に改称した博

博物館は、その名を直訳した通り「ユグノーの記憶の場」として本格的にスタートを切ったはずだった。ところが、1944年、爆撃によりフランス聖堂が破壊され、博物館も閉鎖を余儀なくされた。

戦後、早くも1947年の時点で、仮スタート時の名称「ユグノー博物館」で再オープンの計画が打ち出された。実際1958年にフランス聖堂の1階で小さな展覧会が開かれたのだが、1968年建物の構造上のダメージが深刻で、再び閉鎖に追い込まれた。その後、相次いだフランス教会および聖堂部分の再建工事のため本格的な再開は遠のいていった。しかしながら、その間に新しい博物館をフランス聖堂の塔吹き抜けを取り囲むかたちで再開しようという計画が進行する。

1983年フランス教会、翌84年コンツェルトハウス(かつてのシュピールハウス)と、ジャンダルメンマルクトの建物群の再建・改修が進み、ついに1987年フランス聖堂も現在の姿を見せることになった。その年の7月30日、ユグノー博物館は第二次世界大戦の悪夢からようやく目覚め、再オープンの日を迎えたのである。以来、ベルリンでもっとも美しい広場と称されるジャンダルメンマルクトの一角で、ベルリン市民に、そして世界からの観光客に開かれた博物館として存在し続けている⁽¹⁷⁾。

それでは、基本的に大きな変更もなく1987年から2017年まで30年間展開された常設展の内容を検討していくことにしよう。なお、それぞれの展示室に付されたタイトルは実際の展示ではなく、ホームページのヴァーチャル・ツアーにのみ付されたものであり、本稿でも便宜上それに倣っている(図5)。

(1) ユグノー全体で共有すべき記憶

【第①展示室】 ルターの宗教改革

入口を通過して左の小部屋の左側の壁が、展示の出発点となる。そこでは、プロテスタントの歴史のはじまりを告げたルターにかかる展示がなされている。

展示上部にルターの肖像が配され、メインの説明書きの左には、聖書を読むことの重要性を説く彼の自筆文書と書き込みの入った聖書、1521年に



図6 第①展示室の様子



図7 ガスパール2世・ド・
コリニー(第②展示室)

帝国追放を宣告された際ルターを置き宗教改革の灯火を後世につないだザクセン選帝侯フリードリヒ賢公の肖像が掲げられている。右手には、教皇レオ10世、神聖ローマ皇帝カール5世の肖像とともに、ルターに考えの撤回を迫ったヴォルムス帝国議会への召喚状とその議会の様子を描いた図が配され、宗教改革当初の対立構図がわかりやすく展示されている。さらに右手のボードには、当時の人びとの世界観や様子を伝える木版画が置かれている。

この部屋に用意された展示物はすべてファクシミリやレプリカであり、貴重品を展示しているわけではない。しかしながら、コレクションがなくとも改革派を含むプロテスタントの原点としてルターの宗教改革を評価する姿勢は十分にうかがえる。

【第②展示室】 宗教改革

この部屋の展示は(a)宗教戦争勃発まで、(b)ジュネーヴとカルヴァン、(c)宗教戦争、(d)アンリ4世とナント王令の4部構成である。

まず、(a)では、フス、ウィクリフ、エラスムスら宗教改革の先駆者とされる人びとから、ルターの宗教改革へ展示が移り、フランスでのルターの影響をうかがわせる内容へと続く。フランス語訳聖書とともに、初期に宗教改革運動が展開されたモー司教区の宗教改革にかかわったジャック・ルフェーブル・デタープル(ラテン語名ファーベル・スタプレンス)、そして彼の師でありのちにスイスに亡命したギヨーム・ファレルが取り上げられる⁽¹⁸⁾。その後、フランソワ1世とアンリ2世の肖像とともに、彼らの改革派に対する厳格な姿勢のなかでもフランス改革派教会組織が整うさまを *Discipline Ecclesiastique* (教会規律) を提示することによって表している。そして最後に1559年のパリ市議アンヌ・デュ・プールの火刑図および1562年ヴァシーでのプロテスタント虐殺事件図、そのころの改革派の軍事指導者コンデ親王ルイ1世の肖像を示すことにより、これから起こる宗教戦争の苛烈さ・悲惨さを暗示する。

その宗教戦争の展示に入る前に、(a)の展示の向かいに(b)の展示が配される。そこでは、フランスから亡命を余儀なくされたカルヴァンのジュネーヴでの活躍が扱われる。主には教会活動とともに、彼の創設した神学校ジュネーヴ・アカデミーと彼の後継者テオドル・ド・ペーズが取り上げられ、当地におけるカルヴァンの功績をたたえている。そんななか、反三位一体の立場のため異端とされ当地で火刑に処されたスペイン人医師ミシェル・セルヴェ⁽¹⁹⁾の肖像と20世紀初頭に建てられた名誉回復の記念碑の写真がそっと混入されている。ふとフランス改革派教会の良心を感じさせる展示である。

展示は再び(c)宗教戦争に戻る。そこでは、敵対者ギーズ公アンリ1世やカトリクス・ド・メディチらと対比して、コンデ親王の死後ユグノーの軍事的・政治的指導者であり、1572年聖バルテルミの大虐殺で命を落とした英雄ガスパール2世・ド・コリニーが大きく取り上げられている。

そして、最後のセクションで宗教戦争を終結させたアンリ4世が、「プロテスタントに完全なる市民的平等と限定的ではあるが宗教的平等を与えた」1598年のナント王令とともに大きく取り上げられている。前者については、同時期のプロテスタント指導者フィリップ・ド・モルネーやテオ

ロール・アグリッパ・ドービニエの肖像とともに、17世紀の歴史書アルドゥアン・ド・ベレフィクス・ド・ボモン『大王アンリの歴史』(パリ、1662年)やエリー・ブノワ『フランス改革派教会の歴史』(アムステルダム、1696年)、デスマスクなどが展示され、そのフランス・プロテスタントの歴史に残した偉業が称えられている。後者については、続く説明で「しかしながらこれは一時的なものであり、いずれの陣営をも満足させるものではなかった」とされるが、同王令発布300周年記念メダルとともに展示され、フランス改革派にとっても、そしてのちの宗教的寛容思想にとっても画期をなすものとして意義づけられている。

【第③展示室】 対抗宗教改革

ここは、(a)ナント王令保護下の改革派教会、(b)ナント王令撤回までの改革派に対する迫害、(c)ナント王令撤回後の迫害と亡命の3つの部分からなる。

まず(a)では、ナント王令の恩恵を受け成長した改革派の拠点シャラントンとラ・ロシエルの教会が取り上げられ、そこで活躍したシャルル・ドルランクール、ジャン・ダイエ、ピエール・メルランなどの牧師・説教師の書物や肖像が展示されている。またソミュールやセダンでは神学校が建てられ、救済の及ぶ範囲で考えは分かれたがともにそこで活躍した、著名なフランス改革派神学者ピエール・デュ・ムランとモイーズ・アミローが紹介されている。しかし、宰相リシュリユーが実権を握り、やがてルイ14世の親政が開始されると、王権による監視・規制、宗教的な統一を図ろうとする圧力が強まっていった(図8)。展示では、こうした王権側の人物やその前線で改革派の説得に派遣された著名なイエズス会士ルイ・ブルダールとともに、こうした動きと果敢に戦ったジャン・クロードやピエール・デュ・ボスクら改革派の説教師が取り上げられる。

続く(b)では、はじめにドラゴナードを含むさまざまな強制改宗の手段が紹介され、いよいよフランスの改革派にとっては死刑宣告ともいえる、ナント王令の撤回を宣言するフォンテーヌブロー王令、これに対する人びとの反応を報告したブランデンプルクの商店主ヨハン・ベックの報告が展



図8 国王軍によるラ・ロシェル
攻囲の図(第③展示室)



図9 迫害の苦しみを表す展示(上部左から、ガレー船で使用された鉄球、ガレー船の図、コンスタンスの塔の写真、下部の写真は二枚ともマリー・デュランの生家)

示される。その後、フランスの地を去ることなくカトリック改宗を迫られた「新改宗者」への法令やシャラントン教会の崩壊が展示され、フランス改革派の置かれた厳しい状況を伝えている。

(c)に入ると、王権の迫害に対する抵抗やその結果被った処罰、ならびに最終手段としての亡命が描かれる。具体的には、秘密裡に集会を維持した「荒野の教会」の活動とその指導者アントワヌ・クールや説教師クロード・ブルソンなどが取り上げられる。また、改革派教会の礼拝に参加したことが発覚すると、男性信徒はガレー船に送られ、女性信徒はコンスタンスの塔に代表される監獄に幽閉された。展示では、ガレー船で足かせに使われた鉄球やその刑の苦しみを描いた書物なども扱われる。コンスタンスの塔の石壁に「抵抗せよ」と刻んで亡くなったマリー・デュランや殉教者の苦しみを描いた書物なども展示され、迫害時の苦しみと信仰のために戦った人びとの勇気と行動が称えられている(図9)。最終的に、危険を冒して故国を後にしていく信仰難民の列を描いた銅版画や、亡命後の帰還について記したピエール・ペールの著作などが展示される。

以上みてきたように、これまでの展示は、ベルリンのユグノーに特化した記憶ではなく、フランス改革派に共通した記憶である。と同時に、ユグノー以外、とりわけホスト社会の人びとやプロテスタント信仰をもつ人び

とに、これから始まる展示の主人公たちに対して憐憫の情やある種の共感を抱かせるには十分なものである。

(2) ベルリンのフランス系改革派教区の記憶

【第④展示室】

博物館の展示構成は基本的に館玄関の左手が亡命の大きな波が起こるまでのフランスにおける改革派の歴史であり、右手がベルリンに渡ってきたユグノーたちの歴史になっている。そのため、後者のエリアに入るには一度玄関に戻らなければならない。そのためか、後半部分の導入として、第①展示室の「ルターの宗教改革」の反対側の壁に第④展示室に相当する部分が設けられている。

ジュタールが指摘しているように、カルヴァン派は、元来キリストの贖いを記念すべき唯一の記憶とし、聖餐以外の記念行為について警戒を示している。そのためか、カルヴァンの墓は1564年の死後ほどなく所在がわからなくなっている⁽²⁰⁾。以後、彼が視覚的な事物を用いて記念されることは長らくなかった。この部屋の展示説明によれば、カルヴァンの活躍したジュネーヴ市が国際宗教記念碑を建立することでカルヴァンの弟子や同胞たちの働きを称えたのも、ようやく生誕400周年にあたる1909年であったという。

この部屋の展示の趣旨は、カルヴァン自体を記念することの可否は別として、「忘れ去られていた」カルヴァンをいち早く評価し記念したのが、ベルリンのフランス系改革派教区であったと示すことにある。1885年ポツダム勅令発布200周年に記念碑を建て(図10上2枚)カルヴァンを顕彰し、その後同250周年の1935年にもレリーフを作成している(図10右下)。



図10 ベルリンのカルヴァン記念碑(第④展示室)



図11 第⑤展示室の様子(2)

もう一つの展示ボードには12冊にも及ぶ、カルヴァンの著作、彼や改革派教会にかかわる著作の表紙が掲げられ、同時に手前のショーケースにはブランデンブルクのフランス系改革派信仰難民の歴史書、記念硬貨、祝典のチケットなど1885年

の記念事業にかかわる品々が飾られている。こうした展示は、これから始まる教区の歴史の原点にカルヴァンがいて、フランス宗教改革・改革派教会とのつながりがあることを見る人に強く印象付けるものであった。

【第⑤展示室】 フリードリヒシュタット

いよいよベルリンのフランス系改革派の入植地のはじまりである。図1の入植地誕生以前の地図をスタートに、信仰難民がやってきて新たに町をつくっていくという仕立てで展示されているかのように、手前のショーケースにはベルリンの風景銅版画の両端に入植者の家門リストが配されている。向かい側の壁には、彼らが入植したフリードリヒシュタットの計画図、プロイセン王フリードリヒ1世のフランス教会建設許可書、建設資材の調達や運搬にかかる文書、教会内部の平面図、さらには再建工事の際に出土した瓦の破片や床板などが展示されている。説明書きや教区の墓地に最初に埋葬された死亡記録を示すことで、教会建設に当初からかかわった建築家ジャン・カイヤールを称えることももちろん忘れない。このように展示品一つ一つが、新街区の整備・専用教会堂の建設がはじまった初期の入植地の息吹を伝えている。

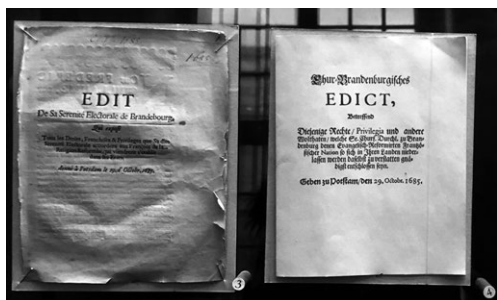


図12 フランス語版・ドイツ語版のポツダム勅令



図13 選帝侯妃からの贈り物
(第⑥展示室)

【第⑥展示室】 ポツダム勅令

この部屋にはいると、左前方におかれた大選帝侯の胸像が目飛び込む。ここでは、(a)フランス系改革派入植者に与えられた特権とそれらを受けての(b)各地への入植の広がりテーマとなり、フランス王権の迫害に苦しんでいた信仰の同胞に手を差し伸べ、公然とフランス王に物申した唯一の君主として大選帝侯と後継者たちが称賛される。ルイ14世と対比させた賛辞や1688年に大選帝侯が亡くなった際の葬列の図はその思いを端的に伝えている。

(a)については、1672年の教区設立に始まるフランス教会の記録が示され、ブランデンブルク選帝侯領がポツダム勅令以前から信仰難民を受け入れ、ナント王令撤回後いち早く同勅令により彼らを積極的に誘致したことが示される。さらに、信仰難民たちの世話を担当した要人フォン・グルムコウやパウル・フォン・フクスの肖像、選帝侯による寄付の呼びかけ・募金台帳、入植者登録簿の展示により、勅令での約束が実際に履行されたことが明示される。続いてフランス人裁判訴訟規定や1709年帰化勅令など法的立場に配慮した文書、土地贈与文書など経済的な配慮がなされていたことを示し、ホーエンツォレルン家の歴代君主への感謝が表される。

そのもっともわかりやすい展示が、19世紀末にC・ヴェンドリンクによって描かれた「選帝侯妃ドロート・ゾフィーによる荘園の寄贈」と題する絵画である(図13)。これは、1686年に彼女がフリードリヒシュトラッセ

129番地の敷地をフランス教会に寄進した事実に基づいている。次の展示室で見るように、ベルリンのユグノーたちはこの地に多くの重要な社会福祉施設を整備し、多大な恩恵を受けたのである。

(b)については、最大の入植地ベルリンとマクデブルクにかかる展示のほか、宮廷都市ポツダム、プレントラウ周辺、シュヴェト、ウッカーマルクのシュトラスブルクなど領内の中小都市に建設された入植地の図面や教会・市庁舎の図が示され、入植の広がりを伝えている。加えて、三十年戦争によって荒廃し人口減少の著しかった農村部への入植についても、グロース・ツィーテン、クライン・ツィーテンなどの農村の図面や入植農場の家屋、アンガーミュンデやバティンの村落教会の図を示しつつ、ブランデンブルク選帝侯領内全体に広がっていたことを伝えている。

【第⑦展示室】 教区内の生活

室内の方々には、「大選帝侯と信仰難民たちの接見」をはじめ、ダヴィド・アンシヨン(牧師)やポール・ジョルダン(牧師)、ジャン・ピエール・エルマン(牧師、コレージュ・フランセおよび神学校校長)などベルリンやマクデブルクで活躍した入植地の指導者たちを描いた絵画が展示され、第3・第4世代までの入植者たちがフランス改革派教区・入植地の基礎を築いてくれたことへの感謝と誇りが表される。そのうえで、この部屋は、宗教的マイノリティである信仰難民にとって、教会が信仰共同体の要であると同時に現実の暮らしにおいても生命線であったことをもっとも強く印象付ける構成となっている。すなわち(a)教会、(b)教会生活、(c)社会福祉の3部からなる。

入口正面に、プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム1世の臨席のもと教会の聖別が行われる場面を描いた、クロースタシュトラセ教会のレリーフ(石膏モデル)が掲げられ、(a)にかかる展示が配されている。ここでは、プロイセン王フリードリヒ1世が1707年3月にフランス改革派教区にフリードリヒシュタット教会を自らの資金とイギリスやオランダから募った献金により建設し永遠に保有することを承認した文書(図14)、塔の完成時に譲渡の準備ができた旨を記した手紙や鍵、同教会とともにクロース

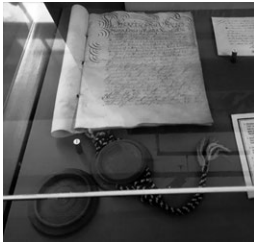


図14 王による教会建設および保有の許可にかかる文書(第⑦展示室)



図15 教会・信仰生活にかか
る展示(第⑦展示室)



図16 救貧にかかる費用を記
した台帳(第⑦展示室)

タシュトラセ教会やヴェルダウア教会、ルイーゼンシュタット教会など他のフランス改革派教会の写真や素描により、フランス改革派教会の発展が示される。

(a)の展示に向かって左手と背面に(b)のセクションがある。まず左手には、教会内で使われていた新約聖書、カテキズム、賛美歌などとともに、子どもたちにわかりやすく宗教改革と亡命の歴史を説いた書物、ならびに中等高等教育の核であったコレージュ・フランセとそこで使用されていた書物や資料が展示され、教会生活を送るにあたっての教育・知的水準の高さをうかがわせる。背面には、図15に見られるように、礼拝時に使われていた杯や献金箱などかつての教会生活を彷彿とさせる事物の展示がなされている。

(a)に向かって右手にある(c)の展示では、教区・入植地内の社会生活がいかにか配慮に満ちたものであったのかがわかる。まず、牧師・長老・教会役員からなる執行機関が置かれていた場所の写真やドイツ語訳の運営規定、決を採る際に使われていたハンマーなどが展示され、自主的な教区運営が明示される。そのうえで、孤児院、親の困窮で教育を受けられなくなった子どもたちの寄宿舎学校エコール・ド・シャリテにかかる資料が紹介される。さらに、老人や病人のための施療院(図16)や19世紀に孤児院とエコール・ド・シャリテを統合した子どもたちのための救貧院にかかる資料が展示される。加えて、年表により、貧民のための製パン所、貧民・病人・産後女性への炊き出しをするためのスープ製造所(Marmite)、貧民たちの冬

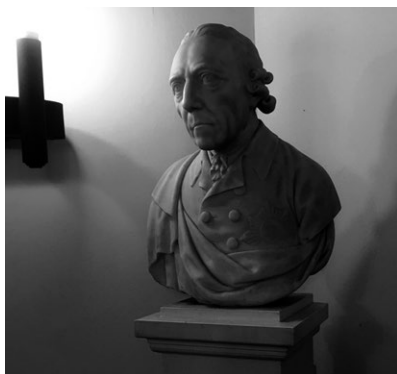


図17 フリードリヒ2世(第⑧展示室)

場の暖房用燃料を調達するための材木組合、中流階層以上の独り身女性のための養老院、高い身分から身をやつてしまった貧民を救済する基金などの設立が示され、材木組合の報告書や互助的な消防団の資料も掲げられている。このように、先述の執行機関の指導の下、セーフティネットの整った入植地の生活が保障されていたことが見る者にひしひしと伝わってくる。

【第⑧展示室】 フランス聖堂

この小部屋は、プロイセン王フリードリヒ2世により、ジャンダルメンマルクトの二つの教会にそれぞれ塔が増築され、現在の広場の美しさが誕生したことを記念するものである。父王フリードリヒ・ヴィルヘルム1世の治世に軍関連施設が立ち並ぶなか、両教会関係者やフランス系改革派教区の人びとがその光景をどのように感じていたのかは知る術もない。だが、フランス聖堂と呼ばれる塔を要した教会のパネルがこれでもかと並ぶ展示には、これを教区のシンボルとして誇りに思う気持ちとフリードリヒ2世への感謝が表れている。

【第⑨展示室】 社会生活

ここは、さまざまな階層・職業出身のユグノーたちが、当初は地元の人びとに必ずしも歓迎されていなかったが、長い時間をかけてホスト社会に貢献し、感謝されるまでになったことをアピールする場となっている。そのために、展示構成は(a)製造業部門、(b)学問分野、(c)代表的な家門からなる。

(a)では、ピエール・メルシエとシャルル・ヴィーニュのゴブラン織り、

ダヴィド・ギュイナンのナイフ、ルイ・ジョルジュの時計など、付加価値が高く洗練された工業製品の製造が取り上げられる。そのうえで、最先端技術を持ち込んだユグノー家系のなかで、宮廷宝石細工師から高級官吏に上り詰めたジョルダン家や金銀細工師を輩出したフォルメイ家、レクラム家などが紹介される。こうした個別の技術だけでなく、商品価値の高い農作物、とりわけタバコ栽培の導入、養蚕・生糸製造業・毛織物加工技術の発展、さらには縫い目なく筒状に織るために高い技術を要した靴下製造業やリボン製造業など一大産業を形成した業種の展示も続く。加えて、フランソワ・ルセルのドイツ・フランス合同商人組合への加入許可証の展示は、こうしたユグノー内の技術・産業が入植地に限定されたものではなく、ホスト社会にも恩恵をもたらしたことを示している。

(b)では、ユグノーたちが、将校や兵士、官吏など文武両面でホスト社会に貢献しただけでなく、人文系・理科系を問わず学問分野で多くの人材を輩出したことが強調される。基本的には、肖像と名前が紹介されていくのだが、その多くはベルリン科学アカデミーのメンバーであった。1809年までにアカデミーの正式会員は208名に上るが、そのうち少なくとも51名がフランス教会のメンバーだった。ここで展示のなかから一部紹介すると、理科系では数学者レオンハルト・オイラー、化学者のフランツ・カール・アシャル、医師であり電気生理学の基礎を築いたエミール・アンリ・デュボワ・レモン、文系では、プーフェンドルフの翻訳者でありローザンヌやグローニンゲンで自然法を教授したジャン・バルベラック、エジプト学者のアドルフ・エルマンらを挙げられる。こうした展示は、ベルリンのフランス系改革派教区が知の巨人の宝庫であったと言わんばかりである(図18)。

こうした教区の知識人たちのなかには、互いに姻戚関係を結び家門を形成し、フランス系改革派教区を入植地時代から20世紀に至るまで支え続けた者たちがいた。彼らに触れた展示が(c)にあたる。たとえば、入植初期のリーダー、シャルル・アンシヨンに端を発するアンシヨン家、フレデリック・レクラムとともに入植から100年の歴史を編纂・執筆したジャン・ピエール・エルマンを輩出したエルマン家などが顕彰されている。彼らに



図18 製造業への貢献(第⑨展示室)

上部の肖像は左から、シモン・ペルティエ(牧師・歴史家)、イエレミ・ビトベ(牧師・ホメロスの翻訳者)、アントワヌ・アシャール(牧師・哲学者)、アルフォンス・デ・ヴィニョル(牧師・年代記作家)、いずれもベルリン科学アカデミーのメンバー。下部のショーケースは、製造業にかかる展示。



図19 ホドヴィエツキ家ゆかりの展示(第⑨展示室)



図20 ポツダム勅令発布250周年にかかる展示(第⑩展示室)

もまして大きく取り上げられているのは、二人の編纂した歴史書全9巻の口絵を描いた銅版画家ダニエル・ホドヴィエツキーと、文学者テオドル・フォンターネの家系である。後者は妻とともに、前者は芸術家家門として娘や孫、そしてその配偶者たちとともに、それぞれに一大展示コーナーが設けられ、彼らの対外的なアピールと教区への貢献が高く評価されている(図19)。

【第⑩展示室】 ポツダム勅令発布／ベルリンへの亡命250周年

この部屋は、このベルリン・ユグノー博物館開設とも縁が深い。20世紀への世紀転換期から持ち上がっていた改修計画が、ドイツ帝国皇帝ヴィルヘルム2世により承認された。建築家オットー・マルシュによる改修は、簡素な教会と立派な塔部分のアンバランスを解消し、聖堂の周囲に新しい部屋を生み出した。そこに文書館や図書館が移転され、同時に博物館ス

ペースとしても利用されることになったのである。そしてこの大改修工事の終了を祝うかのように、ポツダム勅令発布およびユグノーのベルリン亡命250周年記念行事が盛大に行われた。図20の左端にあるのは新聞『ドイチェ・アルゲマイネ・ツァイトUNG』に1930年4月12日付で掲載された、フランス聖堂の改修にかかる記事であり、中央部には式典の招待状とパンフレット、そして集会の様子を伝える写真が置かれている。そこからうかがえるのは、この行事が、ホスト社会への同化がすすむなか、ユグノーとしてのアイデンティティを再確認する場である同時に、混迷する時代のなかでユグノーがホスト社会から置き去りにされないためのアピールの場でもあったということである。

【第⑪展示室】 第二次世界大戦による破壊と戦後の再建

これまでそれぞれの部屋にはメインの説明ボードが入口に掲げられていた。だが、この部屋のそれだけ、黒地に白字で作成されている。というのも、ここが、もっとも悲しい記憶を伝える部屋であり、犠牲となった人びとへのレクイエムの場だからである。その説明書きは、第二次世界大戦中1944年4月7日の日曜日にフランス教



図 21 1944年の爆撃後の
フランス聖堂の写真
(第⑪展示室)



図 22 破壊から再建へ(第⑪展示室)

会・聖堂を襲った爆撃について牧師モヌリが書いた体験記から始まる。それを受けて展示構成は、(a)破壊と(b)再建からなる。

(a)では、破壊された教会や聖堂の写真(たとえば図21)、焼け焦げた梁や建物片、爆撃による細かな破片が突き刺さったままの讃美歌、惨状を伝える新聞記事や報告書など、小さなショーケースに所せましと置かれたこれらの品々が被害のすさまじさと戦争の愚かさを伝えている。

しかし、展示は絶望だけでは終わらない。(b)のセクションでは、各方面の教会からの援助を受けたことを書き添えたうえで、再建中から修復完了後までのさまざまな写真が掲げられ、平和への歩みが語られる(図22)。

展示は、残念ながらここで終わる。第二次世界大戦から復興し、東ドイツ時代、ベルリンの壁の崩壊、ドイツ再統一を経て現在に至るまでの歴史は語られていない。

おわりに

第①展示室についての記述や挿入された数々の写真から、すでにお気づきの読者もいるだろうが、この博物館の展示物には、ファクシミリやレブリカが多い。博物館に貴重な事物を保管・展示するというイメージをもつ方が訪問するといささかがっかりするかもしれない。しかしながら、これまで見てきたように、第①展示室から第⑪展示室までの展示は、一つの物語になっている。この館で重要なのは、展示されている事物の骨董としての価値ではなく、それらによってこの地で語られた「物語」である。

その物語とは、「かわいそうな信仰難民」から「フランス文化の仲介者」としてホスト社会に貢献するようになるまでの歴史である。20世紀の展示もあるが、物語の大筋だけ見れば、フレデリック・レクラムとジャン・ピエール・エルマンの編纂した18世紀の歴史書をベースにしている。19世紀のポツダム勅令発布200周年で編纂されたエドワード・ムレの歴史書とも共通している。ただ、すでに拙稿で紹介したように⁽²¹⁾、19世紀後半の国民国家形成期には、ドイツのユグノー全体の歴史観に「もっともよきドイツ人」像が強く見られるようになるのだが、ここではそうした主張がかな

り後退している。それだけに余計、ここの展示で語られる「記憶」は、それ以前の歴史像で時計が止まっているような印象を受ける。

もちろんそれは、語られることはないにせよ、20世紀前半のドイツの悲しい歴史と一定の距離を置きたいという思いの表れかもしれない。しかしながら、結果として、ベルリン・ユグノー博物館のこれまでの展示は、地方史や宗教マイノリティ自身の歴史の枠をでるものではない。20世紀への世紀転換期にドイツ、少なくともプロイセンの国民国家史に強くコミットしようとした姿勢を捨てた向こうにある彼らの新たな姿はまだ見えてこない。ラヒェニヒトが指摘するような、あるいは実際に教区の人たちと接したときに感じる、コスモポリタンの国際主義に通じるような意識は必ずしも感じられない。

現在ベルリンは、多宗派どころか多宗教を、実にさまざまな民族・国籍のバックグラウンドを持つ人びとの集まる町である。その中心で時を刻んできたユグノーたちが、自分たちの記憶の時計を止めたままでは思えない。再オープン予定の2019年、筆者は、いい意味で混沌のなかにあるベルリンで、この宗教的マイノリティの「記憶の場」が、新たなアイデンティティ構築のために、あるいは他者へのメッセージをこめて、どのような展示を見せてくれるのかを楽しみにしている。と同時に、ここに見た展示を通しての記憶形成のあり方を、ほかの環境におかれたユグノーの博物館のそれと具体的に検討する必要もあろう。そのために、バード・カールスハーフェンのドイツ・ユグノー博物館ほか他の博物館の展示調査も今後の課題としたい。

キーワード：ベルリン、ユグノー、博物館、集会的記憶

〈注〉

- (1) 2017年3月、筆者撮影。以下、写真については、特に断りがない限り筆者による撮影。
- (2) Scharfe, Wolfgang und Scheerschmidt, Holger (Hrsg.), *Berlin—Brandenburg im Kartenbild. Wie haben uns die anderen gesehen? Wie haben wir uns selbst gesehen?*, Berlin 2000, S.55 より。

- (3) たとえば、光本順「ワシントンの博物館展示とマイノリティ」『岡山大学文学部紀要』59(2013年)、77-85頁や、鈴木透「自己表象と集団的記憶喪失——転換期を迎えた国立アメリカインディアン博物館——」『教養論叢(慶應義塾大学)』137(2016年)、55-80頁。
- (4) たとえば、馬曉華「観光・エスニシティ・記憶の文化ポリティクス——アメリカ合衆国におけるマイノリティ集団の博物館を中心に——」『歴史研究』47(2009年)、1-22頁。また、記念物や記念碑の設立も含めて同様の検討がなされている事例として、大津留厚「ボヘミアからアメリカ合衆国ミネソタへ、そして故国へ? : 移民と故郷」『海港都市研究』6(2011年)7-18頁。
- (5) 秦泉寺友紀「今なぜ国立移民博物館なのか——イタリアのナショナル・アイデンティティの現在」『和洋女子大学紀要』第56集(2016年)、29-39頁。
- (6) 安川晴基「ミュージアムと集合的記憶のマッピング——ドイツ歴史博物館、ベルリン・ユダヤ博物館、記録センター〈テロルのトポグラフィー〉——」『19世紀学研究』6(2012年)、3-21頁。
- (7) フィリップ・ジュタル(和田光司訳)「プロテスタント 荒野の博物館」ピエール・ノラ編(谷川監訳)『記憶の場 フランス国民意識の文化=社会史 第1巻 対立』岩波書店、2002年、245-282頁。日本人研究者で同博物館について言及をしているのは、森川甫「迫害下のフランス改革派教会の歩み(二)——カミザールの戦いと荒野の教会——」『関西学院大学社会学部紀要』77(1997年)、41-49頁、特に45頁。
- (8) Lachenicht, Susanne, Musée huguenots et lieux de mémoire en Allemagne et dans les Îles britannique, *Bulletin de la Société de l'Histoire du Protestantisme Français*, vol. 157(2011), pp.583-95. 特に、ベルリン・ユグノー博物館については、p.586f.
- (9) ヴァーチャル・ツアーは、<http://hugenottenmuseum-berlin.de/rundgang/tour.html> で閲覧できる。
- (10) 拙稿「16世紀後半ブランデンブルク選定侯領における『信仰統一化』——教会巡察を中心に——」『西洋史学』第171号(1993年)、18-34頁。
- (11) 拙稿「ブランデンブルク選定侯領における二つの宗教改革と臣民——ルター派の定着をめぐる——」『帝塚山大学教養学部紀要』第53輯(1998年)、1-20頁。
- (12) Wilke, Jurgen, Die Französische Kolonie in Berlin, in: Schultz, Helga (Hrsg.), *Berlin 1650-1800. Sozialgeschichte einer Residenz*, Berlin, 1992.
- (13) 平田達治『ベルリン・歴史の旅 都市空間に刻まれた変容の歴史』大阪大学出版会、2010年、190頁。
- (14) 上は広場全体を俯瞰した絵葉書、下は2016年6月に筆者が撮影したそれぞれ

の建物。

- (15) 拙稿「近世ドイツにおける信仰難民とその子孫たちの集合的記憶の形成——ブランデンブルク・プロイセンのユグノーたちを事例に——」『佛教大学歴史学部論集』第7号(2017年)、19-36頁(以下、「集合的記憶」と略す)。
- (16) <http://hugenottenmuseum-berlin.de/rundgang/tour.html> より作成。
- (17) 博物館の略史については、Hugenotten Museum Berlin のホームページ(<http://www.hugenottenmuseum-berlin.de/de/museum/die-geschichte-des-hugenottenmuseums-berlin>)を参照した。
- (18) モー司教区の聖職者たちの活動については、深沢克己「第6章 カルヴァン以前のフランス宗教改革」『記憶と忘却のドイツ宗教改革』ミネルヴァ書房、2017年、133-163頁に詳しい。
- (19) 邦語で詳しくは、渡邊一夫『フランス・ルネサンスの人々』岩波文庫、2014年(初版1992年)、203-223頁。
- (20) ジュタール、前掲論文、249頁。
- (21) 「集合的記憶」25-29頁。

追記：本研究は、2016年度佛教大学教育職員研修(海外研修)の研究成果の一部である。

